

# 研 究 生 活 遍 歴



植 松 美 彦\*

## 1. は じ め に

私は京都大学工学部において9年間の学生生活を経て、1995年3月に博士後期課程を修了し、その後ただちに大阪大学工学部へ助手として赴任してまいりました。現在は工学部機械工学科機械設計学講座に所属しています。この記事が掲載されるころには、大阪大学における生活も3年目に突入しているでしょう。本コラムでは何を書いてもよろしいと言うことですので、題名は「研究生活遍歴」となっていますが、現在までの生活について特に研究生活面にはこだわらず、つれづれなるままに書かせていただきたいと思ひます。

## 2. 大 阪 大 学 へ

大阪大学工学部への配属については、博士後期課程を修了するよりもかなり以前から決まっていたのですが、博士論文の仕事もほぼ終わり、赴任直前になって大事件が起きました。皆さんご存じの通り1995年1月17日午前5時46分に発生した阪神、淡路大震災です。私は育ちが東京ですので地震には慣れてはいるつもりでした。また、東京では毎月のようにやってくる地震が、10年近い関西での生活ではほとんど経験されなかったことから、関西はなんと地震

とは無縁の土地であろうかと常々から感じていたものです。

地震が発生したまさにその瞬間、私は京都北部の友人宅で複数の友人と徹夜で飲み明かしており、そろそろ帰ろうとしていた所でした。その時京都で感じた「ゆれ」は、かつて私が経験したことのない激烈なものでしたが、TVに映し出される地震発生直後の速報では、神戸が震度6、京都が震度5、その他の地域では震度4以下と言うことで、あれほどの大惨事になっているとはその場にいた誰一人想像だにしていまませんでした。京都では普断と変わらぬ朝が明けつつあり、私が朝7時頃に帰宅した際には、既に叡山電鉄は元気に走り回っていました。さらに、下宿のこたつの上に2段縦に重ねて放置していたビールの空き缶が、倒れもせずそのままになっているのを見るに及んでは、何事も無くまた平穩無事な一日が始まるのだと漠然と考えていたのです。

しかし、その後ニュースの続報で被害状況の詳細について次々と語られるようになり、被災地の惨状が映像として公開され、さらには配属先となる機械設計学講座の城野政弘教授宅までが全壊したとの報を聞くに至り、顔面蒼白となってしまったのを覚えています。幸いにも先生とそのご家族にお怪我がなかったのも、今となって言えることですが、当時はもはや就職できないのではないだろうかと思ひ心配したものです。

大地震より丸2年の歳月が過ぎていますが、多くの方々と同じように忘れ得ぬ大事件としてこれからも記憶に残り続けることでしょう。締切に遅れて申し訳ありませんが、この原稿を書き終えたのが1/17ということもあり、特に鮮明に記憶によみがえります。現在このように何

\*Yoshihiko UEMATSU

1966年5月2日生

1995年3月京都大学大学院工学研究科物理工学専攻、博士後期課程修了

現在、大阪大学工学部、機械工学科、助手、工学博士、材料強度学

TEL 06-879-7241

FAX 06-879-7243

E-Mail uematsu@mech.eng.

osaka-u.ac.jp



事もなく大阪大学に従事することができているのは非常に幸運であり、何か人知の及ばぬもののお助けがあったのだらうと感じています。(研究者らしからぬ発言で申し訳ありません。)

### 3. 新たな研究生活

学生時代の研究テーマは、炭素繊維強化樹脂基複合材料(CFRP)の高温環境下におけるモードI層間はく離き裂伝ばに関するものでした。幸いなことに大阪大学に赴任後も同じテーマについて継続的に研究させていただいております。学生時代に所属していた研究室を去られ、他の大学へと赴任された先生方のお話をうかがいますと、実験系の場合実験設備の問題もあり、テーマを変えずに研究を続けるのはなかなか出来ないとのことで、城野先生のご配慮には感謝しております。

当然のことながら、研究室を移るに当たり新しい研究テーマにもたずさわる機会をいただきました。現在は構造材料の疲労に関する研究を全般的に行っています。特に、変動荷重下の疲労き裂進展、微小疲労き裂の発生と進展、新素材の破壊と疲労強度等を研究テーマとしています。材料の疲労機構に関しては、学生時代機械材料学などの授業で得た程度の知識しかなかったため、研究を行うには全く不十分でした。そこで現在の研究室より機械学会誌あるいは材料学会誌に投稿された論文を1967年当時のものから現在のものまで一通り目を通すように致しましたが、未だに勉強中であるのが現状です。論文に一通り目を通しておこなうことは、研究室を移る前、学生の中に済ませておくべきことだとの指摘もあり、自らの怠慢さを申し訳ないとも思います。

研究室を移ることにより全く新しいテーマに触れることが出来るのは、幸運であると共に刺激的なものを感じています。学術講演会などで公聴にいらっしゃる先生方の顔ぶれが、学生時代に見知った先生方とかなり異なることなどはその一例でしょうか。人脈が広がるのは良いのですが、博士後期課程を修了しているにもかかわらず、講演会の発表であれほど緊張するとは思いませんでした。単に気が弱いだけでしょ

うか？

本研究室での生活も3年目となることから、今後自ら進んで疲労に関する新しい研究テーマを模索していく段階にあると、最近ではプレッシャーを感じるようになっていました。このプレッシャーをプラスのエネルギーとして、研究の糧にして行くべきなのだと自分に言い聞かせる毎日です。

### 4. 学生との生活

助手となり、学生ではなく教職員として赴任して来たので、最初は生活習慣を変えるべきだと考えていました。しかし、実際には朝起きる時間が早くなっただけで、学生との共同生活については以前とあまり変わりばえしないようです。大学を移っては来たものの、学生諸君は酒の飲み方や酔っぱらい方、はては夜中に研究室でコンピューターゲーム等に興じている姿まで、環境が変わっても学生のやることは全く同じですから。さすがに赴任後2年目には、研究室で学生と徹夜の酒を飲むような機会はぐっと減りましたが、ところで、

「なる阪いか京」

なる言葉をご存じでしょうか？これは

「なるほど阪大、いかにも京大」

の略で、その服飾センスの悪さのため、外見からただちに関西の国立大生と知れるという意味で使われていました。私が学生の時分にはよく耳にした言葉です。おそらく、やはり言葉でしょうから、今でも使われているかどうかは定かではありません。しかし、現在でもジャージ姿で校舎内を闊歩する機械系の阪大生の姿には懐かしさがこみ上げてきますし、デジャブに陥ったような感覚です。研究室に来たらまずジャージに着替える学生がいるというのは、他の大学ではあまり見られないのではないのでしょうか。

現在の研究室に赴任してきて、最も驚いたことがあります。各研究室によってかなり差があるようですが、それはスポーツに関してです。テニス、ソフトボール、サッカー、ジョギング等を研究室単位で非常に盛んに行っていること

には大変感心しました。特にテニスに関しては、学生だけでなく、研究室の城野教授、菅田助教授さらには技官の方にも全く歯が立たないのが現状です。実はソフトボールやジョギングに関しても同様に歯が立たないのですが、このようなスポーツ熱に感化され、一つぐらいは得意スポーツを身につけなくてはとの危機感を持ち、私もインラインスケート(ローラーブレード)などを始めて研究室に広めてしまいました。体中打ち身と擦り傷だらけになりながらも大学構内を滑り回り、何とか学生に負けないようにがんばっています。しかし、三十路にもなると若い学生さんの上達の早さには舌を巻くばかりです。いずれにせよ、コンピューターゲームばかりに熱中しスポーツには見向きもしなかった学生時代に比べて、遙かに健康的な生活を送ることができているのも、このような研究室の風潮のなせる技だと思えます。後は酒とたばこをやめるだけです。

今までは、研究室の学生とは同級生として、あるいは先輩として接触していたわけですが、教職員の立場で学生と接するようになり、新たな視点から学生を観察できるようになりました。今では、学生とはこうも自分勝手に教官の言うことを聞かんものであったかと、自分の学生時代を棚に上げて手を焼いています。しかし、自

分の意見を主張しつつ、自己的に研究を進めていく大学院生の姿には、同時に頼もしさを感じるのも事実です。また、学生実験、情報処理演習、基礎科目演習などを担当し、2,3年生とも接する機会を持つようになりました。研究室に未配属の学生との接触は非常に久しぶりなのですが、時たま鋭いハツとさせられるような質問にぶつかることがあるものの、ちゃらんぼらんな学生が多くて困ってしまいます。研究室に配属されれば見違えるようにしっかりした学生が増えてくるのですが、これに関しても自分の学生時代を思い起こせば、何も言えなくなってしまうのが実状です。

## 5. お わ り に

取り留めもなく生活の移り変わりについて記述してきましたが、なんと言ってもここ数年で一番大きな出来事は、長年の学生生活に別れを告げ、助手としての就職およびそれにとりなり大学の移動でした。このように異なる大学と研究室の学風、気質、研究テーマという物を楽しんで行きたいと思えます。また、今までは学生として研究のみに没頭すれば良かったのですが、今後は教職員として、学生の長所を伸ばすようなことも考慮に入れつつ研究を進めていくことができると考えております。

